

両親を失って叔父に育てられた甲府生まれの善吉は、15の春に、江戸に出て一旗揚げようと郷里を後にする。身延山によって禁酒禁煙の願をかけ、富士川を下って東海道を江戸へと下る。浅草の観音さまにお参りして、さあ口入屋に頼んで就活を開始しようとした矢先、スリに遇ってすってんてん。無一文の空腹に耐えきれず、つい出来心で豆腐屋のオカラをつまんで口に入れる。豆腐屋の番頭金公にこっぴどく叱られているのをこの店の主人が引き取って話を聞けば上記の始末。ちょうど豆腐屋では金公に暖簾分けをする時期で職人を一人ほしい。真面目そうな善吉を試しに使うことにした。豆腐屋も法華の信徒、日蓮上人のお引き合わせかもしれないと勝手に合点しての決定だった。

ところがこの善吉、実に誠実で仕事熱心、またたく間に豆腐屋の一切合切を任せられるようになった。朝は朝星、夜は夜星。豆腐に、生揚げ、がんもどきを油だらけになって造っては、天秤かついで江戸の街を売り歩く。「豆腐うーい、胡麻入ーりい、がんもーどおきい」。善吉の明るい性格は街中の評判になって、豆腐屋は大繁盛。

こうして、またたく間に3年が過ぎたある日、この店の主人が女房に、

「むすめのお花も17になった。善い婿を探さなくてはいけないが、わしは善吉と夫婦にさせてこの店をまもってもらいてえと思うがどうだい？」

「えーえー私もそれを考えておりました。お花にや私から話してみましょ」

「ああ、そうしてくれ」

衆議一決してお花に聞いてみると、お花は真っ赤な顔をして小さな声で、

「あたいも善吉さんのことを・・・」

こうして善吉は豆腐屋の若主人となった。こうなるとますます善吉はよく働く。新たに職人も入れて店の規模を拡大し、江戸でも指折りの豆腐屋になっていく。

そんな折、どうやら身延山にかけた願を解きに、また甲府の育ての叔父にお花を見せたり、お花にもきれいな甲斐の山々を見せてやりたい。二人は店を一時老夫婦に任せて旅に出発することになった。

その旅立ちの朝、若い二人のめずらしい旅姿を一目見ようと街中の人々が往来に出てきた。そして、

「善吉さん、お花さん、二人そろってどこへお出かけ？」

と問われると、善吉が、

「甲府うーい」(豆腐うーい)

お花が続けて、

「お詣ーりい、願ほどーきい」(胡麻入ーりい、がんもーどおきい)

